

ともしつごうくこころのあかり>

# 光明

こうみょう

秋

第153号

特集・だだ押しの鬼が直した本堂



しん こん しゅう ぶ ざん は  
真言宗豊山派

雲母馬



総本山長谷寺が、思いもかけない災害に見舞われたのは、平成十五年三月三日、午後四時十五分のことでした。

本堂（観音堂）裏山の椎の大木が倒れ、屋根の一部を直撃し、その骨組があらわになるほどの大きな被害をもたらしたのです。

その時のことを、本堂職員のひとりはいこう語ります。

その日

——春三月とはいえとても寒い日で、三時過ぎまで大荒れの天候でした。それにもかかわらず、お参りの方が二十人ほど来られて。帰られたころには雨は止みました。が、依然、風は吹き荒れていました。

——たまたま電話していたときです。突然、ドーンという轟音とともに、本堂に衝撃が走りました。地震!? それにしては外の本々は揺れてない。何が起こったのか、わけもわかりません。外に飛び出して、音のした本堂の裏手に回りました。

——信じられない光景でした。大人二、三人でやっと手がまわるほどの大木が屋根を覆うように倒れていたんです。周りには瓦が飛び散って、手もつけられないありさま。

——次の災害が起きないようにと、ベンチで囲いをしたりして応急の対応をとった後、関係者への連絡に追われました。



瀧川 伸さん

不幸中の幸いだったのは、その日、建築の専門家が、近くにいたことです。当時長谷寺大講堂の土間が修理中で、その任にあたっていたのが、株式会社瀧川寺社建築の瀧川伸さん。

大急ぎでかけつけた瀧川さんの第一声は「えらいこっちゃ」でした。すでにうす闇が迫る中、まるで巨大な鳥の翼のような椎の黒々とした大枝が、屋根の北西部を直撃していました。五年前の、室生寺

その時、それから



だだ押し の鬼が直した本堂

長谷寺本堂屋根の修復、無事終わる

去る四月六日、総本山長谷寺本堂で川田聖定前親下を大導師に迎え、法要が営まれました。破損した本堂屋根の修理が無事成ったのを、ご本尊さまにお知らせする奉告法要です。春のさなか、折りからの風に桜が舞います。法要に参列した人の中に、ひとりの建築士がいました。大柄なまるい身体にまるい笑顔が印象的な人。

この特集では、修復仕事を担当されたその「技術屋」さんに焦点をあてました。

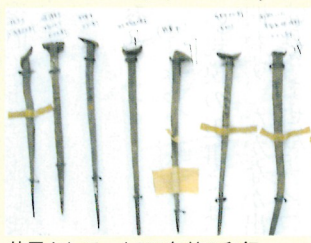
五重塔の台風被害のことも思い出されました。

手をこまねいてはいられませんが、さっそく翌日、お参りの方々の本堂裏への立入りをこ遠慮願ひ、割れた瓦や屋根の部材、それに倒木の片づけのための足場が組みられました。奈良県文化財保存課の指揮で、長谷寺出入りの豊森組によって倒木が撤去された後、破損した部分の調査や修理のための設計計画がたてられました。その間、長谷寺と県との間で何度も修理についての会議がもたれ、平成十五年の七月二十四日、瀧川寺社建築が屋根の復旧工事を請け負うことに決まりました。

直す

瀧川寺社建築は、長谷寺の地元桜井市にあり、先の室生寺五重塔の復旧や平城宮跡に立つ朱雀門の

代の部材が出てきたのは驚きでした。これは現在、長谷寺の宗宝蔵に保管されています。



使用されていた350年前の和釘

もうひとつの発見は、布裏甲ぬめりこうという軒先の部材に慶安元年と墨で書き入れたものがあつたこと。建立以降、何度か屋根は葺き替えられています。布裏甲など軒まわりの化粧材はとりはずされたあともなく、ほとんどが建築当初にすえられたままの部材だったのです。このことから、慶安三年の本堂建立が濃厚とされ、また、以後適切な時期にきちんと葺き替えがなされていたことがわかったのも大きな収穫でした。

解体は始めに瓦や野地板などの屋根材をはずして降ろします。



急勾配の身舎の屋根瓦降ろし

復元、長谷寺では本堂外舞台や奥の院の改修なども手がけた、宮大工の技術と人材を合わせ持つ会社として知られています。

迷いなく、家業の寺社建築の道に入ったという瀧川さん。他社で数年の修行の後、会社に戻って十年余、今や仕事に脂がのりきっている三十八歳の専務です。被害の状況と修復の経過を話してもらいました。

屋根には隅木すみぎという長さ九尺にもなる大きな部材があります。建物の隅を支える背骨と考えたらよいかも知れません。倒木によって本堂屋根の隅木の一部が激しく折れ、あばら骨にあたる長さ十尺の枯木かきが六本も折れていることがわかりました。隅木に関しては、一カ月にわたり本山と県と瀧川寺社建築との間で、損壊したものを補修して使用することも検討されましたが、強度の問題で、決局新

しい隅木に取り替えることになりました。

復旧の前に、いたんだ部材の解体です。八月の始めから、身舎みやか（上層）の屋根瓦や木材と、裳階もろか（下層）の屋根瓦を解体しました。ふたたび部材が落ちて二次災害を起さないためです。

その作業の際、ふたつの発見がありました。ひとつは、専僧せんそう正ただが本山に入られてから間もなくの、天正十六年（二五八八）の銘のある鳥衾とりかき（鬼瓦上おにがわの上にのる瓦）が見つかったのです。今の本堂は慶安三年（一六五〇）の建立たてと聞いていたので、それより古い年



天正の銘のある鳥衾

※はP5の写真参照



素屋根の下での作業

次に柱や屋根を組んでいる部材を解き、その後、折れていたんだ隅木をロープ等でひきつけ、元の一本の状態にして降ろしました。ちょうど新築と逆の作業になります。解体が終わったら工事用の本足場の組み立てです。

——そうして工場での繕いの作業、足りない部材の補足をして下準備を整え、十月初めから、順番に組立て作業をし、十一月に木部の工事が終わりました。ついで十二月に身舎の屋根瓦をすべて葺き、続けて下層部の裳階の瓦を葺き終えました。明けて一月末には足場の撤去をして、復旧工事は完成しました。

直す楽しみ

——これだけの規模の工事には、新築、修復を問わず、なかなか出会えるものではありません。

苦心したのは、軒まわりの寸法の決定です。本堂は、江戸時代のすぐれた建築物です。とはいえ、長い時を経て老朽化は確実に進んでいます。建物は、時がたつにつれ、屋根の重みで下がります。ですから、長谷寺の本堂も、三百五十年のあいだ、ほんのわずかながら下がり続けてきました。

——実測すると十センチほど下がっている柱があります。柱位置で下がれば、軒先ではなお下がる。軒への重みで、軒先で三十センチ下がったところもありません。

このため、まずこわれた部分を実物大に復元する原寸引付という製



原寸引付の作業

図作業をしてから、当初の設計寸法を割り出します。その後、現場での施工の寸法を出し、取り付けの際にも若干の調整をします。

——こうして基本的な設計ができたら次は、その図面に表われてこない「感覚的な他の部材とのバランス」も考慮に入れて、現状の建物と調和させる。さらに将来修理する時のことを考え、数字を割り出す。なかなか複雑ですが、それこそむずかしくもやりがいのある楽しい仕事なんです。

——余談ですが、昨年の秋は雨が多く、工事中いっ度大雨にありました。仮設の素屋根はかけていましたが、一日の仕事が終わると、工事中の屋根にもただちにシートをかけて帰ります。でも、どこにいても屋根のことが気になりました。夜中、雨音にハッと目醒めて、心配で本堂まで車を走らせたことも数度ありました。

後世へ託す

何百年、時には一千年以上もの歳月に耐える木造建築は、地震や火事は別にしても、長年の風雨で徐々にいたむのは避けられません。折にふれての修繕が肝心です。

総本山長谷寺は、過去の適切な時期に適切な処置を施してきたからこそ、慶安三年建立の本堂が三百年以上もの間、根本的な大改修なしに現代まで維持されてきたのでしよう。

そこには、あまたの善男善女の、長谷の観音さまへの篤い信仰がありました。今回の倒木による本堂の修復にも、全国の末寺・檀信徒・篤信者からたくさんのご寄付が寄せられました。

そして、時々の修理にたずさわった多くの職人さんの力があります。瀧川さんはこう言います。

——長年の風雪に耐えてきた本堂の維持修繕にかかわる喜びは、何ものにも替えがたいものがあります。以前、本堂の外舞台の改修の時、擬宝珠（まぼし）の金物はずしてみると、そこに祖父や父の書入れがありました。感慨ひとしおでした。

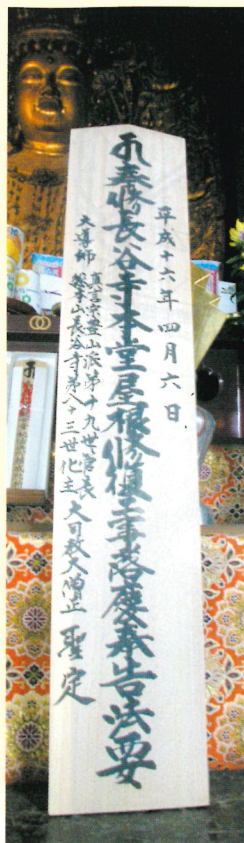
——修復のときはいつも、はるか昔の職人の技を目のあたりにします。最初に造った人、それを修繕した人。その人たちの思いがそれぞれの形となつていまに残っています。

——今回、修復工事をさせていたいただきましたが、後世の同業者が必ず私どもの技術を見る日が来るでしょう。その時に恥ずかしくないようにという気持ちは常にあります。

祖父の代から諸堂の増改築にたずさわり、長谷寺への思いは人一倍という瀧川さん。二年前には春を呼ぶ長谷寺の代表的行事「ただ押し」の鬼役もつとめられました。

ただ押しの鬼は一年の悪を一身に負って人に払い出されますが、今度は瀧川さん、鬼は鬼でも超人的な力をふるって悪しきものから人や物を守る鬼。そう、鬼瓦の鬼と同じ鬼になりました。

これからの歲月、鬼の瀧川さんが指揮し修復なつた本堂屋根が、ご本尊十一面観音さまを確とお守りするのです。



## ふるさとのお寺は心のふるさと

「長谷寺本堂の大屋根が壊されたことは、最初患者さんから聞いてほんとうに驚きました。町中それは大騒ぎで……皆さん非常に心配していました」

こう話されるのは、初瀬の町で昭和四十一年に内科の医院を開かれた田守靖男（たもりやすお）さん（74歳）。開業当初から町のお医者さんとして地元（よこまち）に親しまれています。長谷寺の僧侶の診察にもあたるなどして、先々代から続く信仰はいっそう深まったといえます。屋根の惨状を見て、率先して浄財をお寄せくださったひとりでです。

「子どものころはしょっちゅう、登り廊のわきを流れる水路で沢蟹をとったり、仁王門のまわりでかくれんぼをして遊びました。また、本堂の外舞台で正座して法話を聞いて、足が痛かったことも覚えていています。当時はお寺のことはもちろんよく分かりませんし、信仰心といえるようなたいそうなものもありませんでした。でもお寺で遊んだりお坊さんのお話を聞いたりした記憶が、知らないうちからだに染みこんでいたんでしょね。時がたつて、それが突然芽吹いたという

か、たぶんそのころの記憶と経験が、いまの長谷の観音さんへの信仰のもとになつていっていいでしょう。ですから私はまわりにも、むずかしいことは考えずとにかくお参りしなさいっていうんです。なんでも初めはゼロからなんです」

「下界から天上の世界にきた……お寺に参るといつも心からそう思います。七十年このかた初瀬に住みますが、長谷寺のすばらしさだけは少しも変わりません。花の御寺（みでう）といわれていますが、花が咲いていようがいまいが、お寺はいつも心に安らぎを与える不思議な力を持つています。私にとって長谷寺は日本で一番の寺。と同時に、心のふるさとなんです」

にこやかに語る田守さんのお宅の仏壇には、長谷寺の十一面観音さま写しのご本尊が大切に安置されていました。



田守 靖男さん